

コロナ禍に負けない、人間形成を目指して。

禍= (わざわい)

コロナ禍のなか、新生活様式に合わせて行かなくてはいけない事が沢山ありますが、不自由と感じるのではなくこの不便になった世の中を教材に変え、どうやって乗り越えていくか子供たちを巻き込んで一緒に考える事ができる様になると良いと思います。

大人も解らない事だらけ。この様な出来事はなかなか起きることではありません。子どもと一緒に出来ること、出来ないことを考えるいい機会になるでしょう。

出来ないからやらないのではなく、やりたいという気持ちに向かってアイデアを出し合って対策を考えて実行していく事への大切さを知れる様に子どもたちに関わりたいです。

これらのことは、普段の幼児教育に求められている事と同じ事だと思います。大人が知っていることであってもやり方を教えるのではなく、知らないふりをして一緒に考える関わりをする事に似ています。一つ一つ仮説を立てて実証し、そして検証して振り返り、成功するまでやり続け納得できるように活動を毎日の生活に入れる事が幼児教育になります。

例えば、運動会は密になるから出来ない、ソーシャルディスタンスを取れないから出来ない。または、対策をとって行うが、実際子どもたちは大人が考えた対策を遂行するだけでは、思考を経験に活かせなくなるでしょう。どうしてこうなったのか、どうしてしなきゃいけないのか、どうして運動会をやるのかを納得と理解する必要もあると思います。楽観的にやった方がいいではなくて、行うことに意味を見つける事が必要でしょう。そしてその中でできる事を模索して行き、実行する為の「ねらい」を具現化する事が大切になります。

現代の幼児期教育に求められていること。築葉根幼稚園で目指す「幼児教育の基本概念」と背景、幼児に関わる大人とのより良い関係作りと実行している事。

『習うより慣る。失敗は成功のもと。正直者は救われる。体験こそどんな教科書より勝るものはない。机上の空論。百聞は一見に如かず。結果より過程。経験を活かせる活動。行動は正しても人格には介入しない。』など、ことわざや慣用句などにも子どもの成長に欠かせない言葉はたくさんあります。しかし、その中に受動的なものはないのです。全てに能動的な関わりが必要になっている事に気付かされます。

幼児期の学習は、与えられる事をこなすのではなく自分のできる事を反復して行う事が有効であり、興味関心と向上心を持てる様に、見守ることの出来る大人がそばにいる事が大切になる。

基本的に子どもたちは、興味関心の塊で新しいもの好きです。興味を持ったものには目も心も奪われます。その性質を理解してあげる事が大切で、その中で選んだ事に没頭し、やり遂げた成功体験を重ねられる様に肯定的に認めてあげられる大人が近くにいることが必要になります。『これをやってあげた』『これだけ教えた』など大人のエゴで子どもの成長に対価を求める気持ちを持つては、伸び伸び育たないでしょう。結果を出さないとはいけなくて、日々『ビクビクした』生活を送り大人の顔色を伺う生活になってしまいます。この時期にしっかり成長しないと、大人になっても顔色を伺う生活から抜け出せなくなってしまいます。

子どもたちは、大人の意図する事に沿う事は殆ど無いでしょう。また、大人は当たり前のことを出来た時に褒めてあげる事も少ないと思います。小さな事の成功体験の積み重ねで善悪の判断も付くでしょう。誤魔化したり嘘をついたり大人の都合がいい言い訳が言えたことが成功体験にさせたくありません。

日々の保育の中で、幼稚園だからこれをしなくてはいけない、これが決まりだという考えでは、これからの幼児教育は成り立っていかない時代に突入したと思います。家庭、地域、幼稚園と三者が共通理解を持ち、互いに任せる事ではなく、子どもたちを取り巻く環境を24時間体制で見守っていくことを再度確認しなければいけない時代でもあります。

三者が基本的な概念の共通理解と、学校施設は、法律の教育基本法を保護者に伝わりやすい様に具現化しなければならないでしょう。

『自ら学ぶ姿勢』

人間形成の中で一番大切と言っても過言ではない力「自ら学ぶ姿勢」この力が育たないと、社会に出てから本人が困る。「社会」とはいつからだろう。一般的には自立して生計を自ら立てることが出来る様になってからとを感じるが、個人差は多少あると思いますが他者との関わりが多くなる幼稚園などの年齢でしょう。

この頃までに「自ら学ぶ姿勢」が芽生ておかないと今後の生涯に大きく影響してくる事は間違いないです。

1歳から始まる、自ら学ぶ姿勢。人は1歳ごろより人の真似を意識的にしながら学習していくと言われていています。特に道具の使い方は身近な人や近くで使っているのを見て真似をしたくなります。子どもが横にいる人が使っているのを見て、本人がやってみようと思えたり、欲しくなるまでは使い方を獲得しようとしません。

例えば、スコップ。大人はスコップは砂を掘る道具と固定認識しているのは、経験があるからで乳児は掘る道具としての経験や認識がありません。スコップは楽しいよと家の中で与えても、それは大人のエゴや指示になってしまいます。

乳児は誰かが使っているのを見て、欲しいと思い使うまで興味は持てません。乳児は理屈ではないのです。誰かの真似をしたいだけなのです。そして、それが後に活かせる経験の一つになるだけです。色々なスコップを触って、砂を掘ってみて、また違うスコップを使ってみて、大きいスコップは持ちにくいから嫌、近くの人が使っている物がよく見えて、そして真似をすることを、ただ永遠と繰り返す行動が経験につながります。近くにいる大人が優しく口や手を出さず見守り、褒めてもらうことで自尊感情の芽生も始まります。

砂を食べる経験も必要です。つい食べてしまいそうになると止めてしまったり、砂を食べるからもうさせない、食べちゃいけないとやる前に強く言われ、大事な経験を失ってしまう。砂を食べてしまって、嫌なことが分かれば食べなくなるでしょう。これは後の道徳性を培う「自分がやられて嫌な事は人にやっちゃダメ」と悟らせる言葉に有効な事です。

「自分がやられて嫌な事」とは、例えば蛇が好きな人は蛇を近づけられても何とも思いません。でもなぜこの様な事を言うのでしょうか？幼い時に沢山の嫌なことの経験をたくさんしたから、ピンポイントの嫌なことではなく、相手の心情を理解できる様になったからです。

自ら学ぶ姿勢は、興味を持った事を心ゆくまでやり切る経験を積み重ねた結果、身につく「力」ではないでしょうか？その中で、使ったものは片付けるなどの規範意識や嫌な経験を積み重ね道徳性が身についていくのでしょうか。

指示が多すぎて、自分の意思とは関係なく動いていく経験は後に活かすことが出来ないでしょう。本人が直感でも、考え抜いた行動でも、それは本人の思考と自立心が有り、健康な心で成り立ったこの上なく素晴らしい経験になるでしょう。

乳幼児期の楽しい経験、嫌な経験や大人が無駄に見える経験の3つが多い人ほど人間が豊かになるでしょう。

新しい事を覚えるのを苦痛になる前に、知る喜びを持てる様になりましょう。出来れば、経験したことを明確に活用できる生活を10歳ぐらいまでに経験させ、自ら問題点を見つけ解決できる様な能動的に動けるようにしてあげましょう。そして、大人の指示も10歳ぐらいまではしない様にしていきましょう。興味関心で出来上がっている人間の本質は変えてはならないと思います。

生活をくり返していく中で、心ゆくまで充実した生活を送りながら、他者との関わりを通して、我慢や相手を思いやる心が育ち、そして耐性がついていくことでしょう。

人間の成長には、興味関心と真似を自らしたいと思うことが不可欠です。これは、生涯にわたって必要な事になります。

大人も、自分に必要だと思う事柄に興味関心（必要性）を持ち、真似（勉強）をする。これが出来ない、対人関係や仕事関係で問題が起きてしまうでしょう。

興味がある事に進んで関わり、最後まで責任を持つ。これが「自ら学ぶ姿勢」の原点だと思います。人の性格は、十人十色、興味の持ち方、興味に向かう姿は人それぞれ違います。全員が同じ事に興味を持つはずがありません。子どもたちに自ら学ぶ姿勢を育てようとしているのですから、全員に強要する様な一斉的な活動や一方的な指示では育たない事を理解してあげるのが大切で、何を育てようとしているかを認識しなければなりません。大人は、国が定めた教育を受けてきていて、国を支える一員として課程を修了しているので我慢しなくてはいけないところもあるのも事実です。

子ども達の社会性や道徳性は最初から多人数では育ちません。一緒にやっているから、同じ部屋にいるだけでは、協同性も育ちません。自分の周りに認識できる人数も、年齢など個人差が大きいからです。年齢やその子にあった人数のグループや交友関係を見極めてあげましょう。

『幼児期の遊びには大人の数倍の「人生経験」が詰まっている。』

大人が思っている以上に、遊びの中には人生観だったり生活に必要な学習が入ってる。幼児は、大人が何日、何ヶ月とかけて経験する事を、1日の生活中で何回も経験している。「店員と客のトラブル。」

大人の世界であれば、多かれ少なかれこの様なトラブルはあると思います。店員の態度が悪かったり、客の横柄な態度など様々な事例があります。ほぼ一生嫌な人と思い、その店に2度と行かない人もいるでしょう。また、お互いに落ち度がなかったかなど、考えることもするでしょう。しかし、この様な事は頻繁に起きる事では無いと思います。失敗を成功に変える経験に出会えるチャンスは少ないです。

でも、子どもたちはこの様な経験を1日の中で何度も繰り返します。子どもたちは許しの天才であるが為、人間関係の濃い経験を1日の中で何回も出来るのです。

おもちゃを取った！取られた！意地悪された！たたかれた！など大人の世界でやったら警察が介入してくる様な事も日常茶飯事。でも、何度も許し、すぐに遊ぶことができます。繰り返してこの経験が多いほど後の人生観に大きく影響してきます。結論から言うと、初めから決まり事でがんじがらめにしたり、やる前にやっちゃいけない事を指示するより、問題や失敗を起こして一つずつ解決しながら考える事をしていく方が良いです。

ちなみに、経験していない事を指示しても無意味です。言葉だけの理解を求めても逆効果になります。

また、子ども同士の世界で失敗をさせるほうが大人が関わるより数倍成長があるでしょう。大人は、陰からそっと背中を突つく程度の関係が良いと思います。そして、一つ一つの遊びの中に『幼児期に育てほしい10の姿』がどのくらい入っているか見つけてあげると良いかもしれません。10の姿は一つの活動に偏りが無いように入っていることが望ましいです。

「鬼ごっこ」から見る、幼児期に育てほしい10の姿

[鬼ごっこの概要]

鬼や逃げの人、決まりや場所を決めて、捕まらない様に鬼を見ながら逃げ、捕まえやすい人を探しながら追いかけて、仲間を助けたりしながら元気に外を走り回る。

健康な心と体

元気に走り回る。

自立心	捕まりたくない捕まえたい。
協同性	仲間を助ける。
道徳性・規範意識の芽生	決まりや場所を守る。
社会生活との関わり	友達や先生との関わり。
思考力の芽生	捕まえたり上手に逃げる。
自然との関わり・生命尊重	外を元気に走る。暑さ寒さを感じる。
数量、図形、文字等への関心・感覚	あと何人残っている。どこを走れば捕まえられる。
言葉による伝え合い	鬼を決める。ルールや何の鬼ごっこするか決める。
豊かな感性と表現	つかまりたくない、捕まえたいの中に経験がある。

幼児期の遊びの中には、1人遊びでもほぼ10の姿が入っていて、他者が入れば必ず10の姿が全て入っている。どの活動に対しても、健康な心と体が不可欠で興味関心を持って達成感を味わえる様に、大人はナッジしていくことが必要になる。

「子どもと大人が主体性を持って生活をする。」

お互いに主体性を持つという事は、どちらにも同意があるという事になります。生活の中に一方的な指示と受動的の関係になってはいけません。互いに指示で相手を動かす事でもです。

指示というと、大人が子どもに活動を一つ一つ行動を伝える事と思いがちですが、子どもからの指示で動く大人もいます。我が儘による大人が甘やかす行動など。

学校行くから、おもちゃ買って。など、対価ありきでの生活。対価の条件を先に提示して行動を約束する。これには、10の姿は入っていません。

生活の中で忘れ物をした時に、お母さんが入れてくれなかった、お母さんが忘れたなど言う子がいれば、逆に、なんで自分で入れなかったの、鞆の上に置いといたでしょ、自分で入れる約束だったでしょ、などと言ひ合う事もあります。

または、全部大人がやってしまい、本人はカバンやランドセルに何が入っているかも分からず、登園する子もいるでしょう。このタオルが良い、このハンカチが良いなどと少しのこだわりを持って、登園する方がいいと思います。

物事をお互いに相手のせいにする事は、道徳性や規範意識の芽生など思いやりが育たなくなってしまうです。

『興味関心を持てる生活を』

興味関心を持てる様に、日々の生活の中に新しい発見を用意してあげましょう。用意した全てに興味を持たなくてもがっかりしないでください。十人十色です、自分と他人は同じ感覚ではないのです。だから、用意する「もの」はなんでも良いのです。日々違ったものが目に触れればそれだけで刺激になるのですから。たとえば、幼稚園に行ってお友達のキーホルダーが欲しくて取ってしまうのは正直な感情です。この子は、この様なものに興味があるのだと受け止めてあげましょう。そして、自分の大切なものがとられたら嫌だよねと悟らすように話して、謝りましょう。

幼いときは罪を憎んで人を憎まずを心がける方がいいでしょう。その子を責めるのではなく罪を教えるあげましょう。罰がないと止めなくなってしまう前に、理性や道徳性を身につけていきましょう。

そして、自尊感情が持てる様にして相手を認める思いやりを育みましょう。

子どものために考えたり、振り返ったりできる時間や気持ちを持てる様に、タスクにならない生活の計画を立ててみる事もできたらいいと思います。

『上記のことを踏まえて幼稚園では以下のことに留意して毎日の保育をおこなっています。』

[集団活動]

社会生活の基礎を培う時期です。まずは、自分と家族以外の人がいることを知る。

やりたいことや思っている事は、考えて工夫したり経験を活かさないと伝わらないことを知る。など、自分以外にも人がいる事を知ってもらい、最終的に他者との関わりが楽しい事を知り、協力することが楽しいという事を知ることが出来る様になる。

[文字数・知育]

幼児期の学習はどんなことでも興味関心から。

そして成功体験を重ねて自尊心を持てる様に評価し継続できる環境を整える。と、言葉で書くと簡単な様に見えるがなかなか難しい。

自尊心を持ってない様な評価をすると、対価を求める様な行動になる。書けたら出来たら何か買ってあげる。そもそも自尊心は本人がやり遂げ納得する事であって他者が対価を支払うものではない。

認めてもらえたという、自分を好きになる事なので外からの対価が無いように、自分で出来た喜びが感じられる範囲での学習。知ることができた喜びが感じられる様に理解しやすい活動で、なお、反復と継続性がある活動。

10の姿にもあるように、数量図形文字等への興味関心が持てる様に、知ったことが喜びや、成功体験につながる様に生活をコーディネートし、活用場を作ってあげる。

特に文字は、基本がしっかりしていないと文字への興味関心が削がれてしまう。平仮名やカタカナは小学校で習う事に法律でも決まっています。書く事に集中するより、読める事が楽しくなる事へ意識を向け、基本練習をたくさんしてあげる。

基本練習は、○△ と直線、波線などの模様や絵をクレヨンで描き、右回り左回りなど様々な方向から描く練習をする。

これは、文字を書くときに書きにくいから嫌になってしまう事も防げ、神経の伝達も早めていきます。

この練習には副産物もついてきます。箸の持ち方です。クレヨンをしっかり持てないのに箸を上手に扱うのは無理な話になります。矯正箸などで箸の練習をするよりも、クレヨンでの基礎練習を沢山やる方が近道だと思っています。それにスプーンやフォークを使って食べやすくしてあげて、食事を楽しくさせてあげる方がいいと思います。

クレヨン→マーカー→筆→鉛筆などの順でステップアップしていきます。

[縦割り保育]

昨今、国会内でも出てくる縦割り社会。しかし本来の縦割り社会は、経験者が次代を担う人へ経験を伝承する事だと思う。上級者が下級者に対して用事を与えることではなく、論理的に仕事を与え経験を積ませる繋がりであるべきだと思う。

幼稚園での縦割り保育は、後者の様に、下級生に見本を見せ生活に必要な術を体を張って伝えていく活動です。同じ遊びを異年齢でするだけで、技術などしっかり伝わっていきます。「子ども先生」の感染力には大人は勝てません。

良い関係で培われた縦割り社会は、尊敬や敬う心、思いやりが自然に身についていきます。

[文具ワゴン・自由遊び]

幼稚園の生活は、全てが幼児の自由の選択がある事が望ましい。

全て、子どもの自由ということではありません。全て自由だと幼稚園に行く事も、学校に行く事も自由になってしまいます。

その時の状況下の中で、自分のやりたい事を選択するという事になります。

アプローチが違って、結果や目的地が同じになれば良いと思います。結果的に同じ行動になる事が多いですが、その行動を指示で行なった場合と、自分で見つけた時とでは、『月と鼈』の違いが出てくるでしょう。

回りくどい行動や時間のかける箇所が大人から見て変であっても、やってみて気付く事を幼い頃にしておかないと、必ず後の生活に悪影響を及ぼします。

興味関心を抱かせて関わる時間や種類を増やしてあげる事に全力を尽くす事が大切だと思っています。

[経験こそが人生の糧になる。]

どの様な経験でも人生の糧になる。無駄な経験は何一つないと考えています。無駄な事を無駄と思える考えができる事を学習する事も大切。指示だけをこなす生活では横断的な経験にはならないので生活の中に、国語、算数、理科、社会、音楽が入り意図的に意識できる様に関わる環境を用意する。

経験を活かして新しい事に向かっていける姿勢を作り上げられる様に、一つ一つ伝わったかを確認しながら生活を送れる様にする。

- ・生活の経験、生活しながら得た経験はその人の宝である。
- ・工夫することが出来る人は、幼い頃にたくさん失敗した経験をした人だ。
- ・大人の指示を減らせば、自然と失敗が生まれる。
- ・失敗を経験させることが出来る大人は失敗が大切な事と知っている人であろう。
- ・失敗や挫折は幼い頃にさせなくてはならない。成功は失敗の積み重ねの上にある。
- ・幼い時ほど大人の経験や先入観が成長を邪魔してしまう。
- ・小さな成長を見つけてあげる。

子どもには本来「自ら学ぶ姿勢」の素質を持っているが、活かすも殺すも大人次第である。を心がけながら、関われる様にして行く。

『ひと』は、人を傷つけ人に悟らされ、人に傷つけられ人の温かみで救われ、壁に突き当たり人と一緒に歩いて乗り越えて、人は豊かになっていく。と、幼稚園はそうありたいと考えている。

『禍い』と『災い』は同じ読みですが、両者には明確な違いがあります。
阻止できる災いか、できない災いかで使い分けられているのです。

災いは、地震や台風などの『阻止できない』災害に使われます。
一方、禍いは、人の手や努力などによって『阻止できる災い』に使うのが一般的です。

新型コロナウイルスに関しては、予期のできなかったウイルスによる災害ではあります。
しかしながら、感染拡大の経過や成り行きについては『一人ひとりの意識や行動次第』
という面もあるため、阻止できる災いとして禍が使われているのでしょう。